

小特集 「日本の AI 元気な若手の動き」

# AI 若手の会

## AI Youth Community

<https://sites.google.com/view/ai-youth/>

〒102-0071 千代田区富士見 1-3-1

富士見デュープレックスビズ 5階 (株)ホットリンク

TEL 03-6261-6930

研究のキーワード : artificial intelligence .

### 1. はじめに

はじめに断っておくが、当団体はまだ発足途中であり、まだ正式な活動は一度も行われていない。その意味で本小特集に居並ぶ「元気な若手」の中に混ざるのはおこがましい話である。しかし、「他の若手の会のように元気な若手が集まる場にしていきたい」という思いから、本小特集に立候補し、原稿を載せていただくしだいである。

### 2. 設立趣旨

#### 2.1 発端

「やあやあ柿さん、ようやく会えましたね」。前々回の人工知能学会全国大会 (JSAI 2015) での一コマである。近年の人工知能学会 (JSAI) の隆盛には目を見張るものがあるが、それゆえ全国大会では数年前と比べて数倍の人出となっており、もはや示し合わせなければ知り合いの研究者と顔を合わせるのも難しい。以前であれば、身内で話しながら参加者交流会 (懇親会) やセッションをランダムウォークしていれば、自然と知り合いとすれ違い、そこから交流を開始することができた。今や身動きするのも一苦労なほど混雑している。そのような状況では、明確に意図をもって動かなければ、コミュニケーションをすることが難しくなっており、結果としてごく小さな身内で固まることが多くなってしまふ。そのような背景において、近い世代の研究者と交流する場が JSAI にほしい、と切に感じるようになった。ただ懇親会を開催するだけでは何も残らないし、筆者らとしても、日常的な愚痴をアルコールで霧散させていたわけではなく、きちんと研究に関連した議論ができ、かつ継続していく場がほしい。そのようなモチベーションに加え、MYCOM 2012 に参加したメンバからの復活を望む声もあり、今回の AI 若手の会を新たに構築する試みが始まったのである。

#### 2.2 背景と経緯

AI 若手の会を構築するにあたり、背景知識として、以前開催されていた本学会の若手の会、MYCOM (Meeting for Youth COMMunity) について説明する必要がある

だろう。MYCOM は 2000 年に発足した若手主体で運営される会であり、毎年合宿形式の研究会を開催していた。多様な専門領域の異なる若手研究者同士で議論を通じて、AI 研究に対する共通した問題意識の確認やその解決策の模索、より独創的な研究の発展などを目指してきた。しかし、2012 年を最後にして開かれていない (筆者はその最後の会に参加者として出席していた)。あちこちで再開してはどうか、という声は聞かれるものの、なかなか再開には至らない。なので、今回若手の会を新たに構築するにあたっては、開かれなくなった背景をひも解いていく必要があった。

MYCOM が開催されなくなった直接の理由は、翌年度の担当者が決まらなかったことである。ただ、それをもう少し背景的に見ていくと、「年々参加者が減少していた」、「合宿形式の会を運営する負担が大きかった」、「各所でもっと領域に特化した若手の会が開催されている」などの間接的な原因があげられるだろう。これをやや強引に一つの結論に帰着させると、MYCOM 自体、発足当初に掲げた役割をすでに終えていたためといえるだろう。分野横断で議論するのであれば JSAI 全国大会自体で行えばよいし、近い分野の若手で喧々諤々の議論をするのであれば、より領域に特化した若手の会に参加すればよい。そのような背景を考えると、当初の役割を終えた MYCOM が自然消滅していったのは当然の結果であるとも考えられる。

#### 2.3 設立経緯

先に述べた背景を踏まえると、AI 若手の会を新たに構築するにあたり、その意義を改めて問い直す必要があった。そこで、JSAI 2016 において、筆者と同世代の方を中心に、今現在勢のある方や他の若手の会を運営している方、JSAI 全国大会の大会委員として動いている方に集まっていただき、どのような理念・目的をもって若手の会を構築すべきか、またそもそも今さら新たに構築する意義はあるのか、といった内容の議論を行った。そこで今回議論として取り上げられ、会を立ち上げていく中で特に考慮した点は理念、意義、継続性の 3 点である。

理念については、言わずもがなである。組織やコミュニティの在り方は時間的に変化していくものであるが、その際に立ち返るべき原点がなければ、時間的一貫性のないものになってしまうことが危惧される。そのような観点から「研究に関連したトピックについて、若手が忌憚なく議論ができる場を提供する」という会の目的を設定した。この目的については以前の MYCOM と類似したのとなっている。ここで「研究に関連したトピック」とは、互いの研究内容に留まらず、研究コミュニティの運営、研究者の在り方や人生設計、実社会における活用など多様なトピックを想定している。それらを通じて次

世代の人工知能研究を担うような一そして日本にとどまらずグローバルに活用できるような一人材を輩出することを目指していきたいと考えている。

意義については、前述のようにすでに若手の会や研究会が多く存在する中で、しかも一度は自然消滅してしまったAI若手の会を改めて再度立ち上げる意義を考える必要があるということが議論の中で大きく取り上げられた。最終的には「JSAIらしい多様性を包含しつつ、分野横断で議論できるようなイベントを開催する」、「JSAI全国大会に若手を定着させる」という二つの意義が提示された。特にJSAIが大規模化してしまった今、分野横断で議論できる場を再度確保する必要があるだろう。

継続性については、一度立ち消えてしまった場を復活させることは容易ではないし、そのような場が本当に求められているかも未知数である。単発で終わってしまうイベントや誰も求めていないイベントに多くの人的リソースをむだづかいしてしまうことは本意ではない。そこでまずはスモールスタートとしてJSAI全国大会に合わせて最初のイベントを開催することとした。イベントの詳細は後述するが、今回のイベントを試金石として、また次回以降のイベントの在り方について考えていきたいと考えている。

### 3. 活動状況

前述のように、AI若手の会では、最初の試金石として、2017年度人工知能学会全国大会（JSAI 2017）で学生や若手研究者が集まれるような場を企画することとした。現在のJSAIでは、前述のように学生や若手研究者が会場に入る機会が少なくなっている。それに伴い、JSAIに若手として残る人材も減っているように感じる。そこでまずは「JSAI全国大会に参加した若手研究者が、次回以降の全国大会に継続的に参加したくなるような場を提供する」ことを目指す。

イベントの形式としてはランチセッションを考えている。本イベントでは、テーブルごと（5～8名程度）に、オーガナイザを配置して小規模セッションを開催する。オーガナイザは、若手が話を聞きたいような今、勢があつて、活躍している人材を選定する予定である。このような小規模セッションを並列開催することにしたのは下記のような理由からである。

まず、若手研究者が興味をもつトピックをいくつも扱うことができる。JSAIの良さの一つはさまざまな領域を許容するその多様性であるが、オーガナイザを適切に選定することでその良さを体現したJSAIらしいセッションにすることができると考えている。また、実際どのようなトピックについて若手が問題意識を感じているかを明らかにすることも目的の一つである。個々のセッ

ションの規模を小さくすることで参加者の能動的な参加を求めるということを意図している。聞くだけの受動的な参加になってしまうと、次回参加へのモチベーションが高まらないであろう。企画者の負担が大きくないことも特徴である。セッションのコンテンツ自体は各オーガナイザにお願いするので、企画側はそのハンドリングと集客に集中することができる。

なお、JSAIの若手研究者向けのセッションというすでにメンタリングセッションがあるが、こちらとは目的も参加者の意図も異なるため、企画内容が重複する可能性は低いと考えている。メンタリングセッションは「メンタリング」という言葉が示すように、セッションを通じて自身の研究や将来について考えることを目的としている。一方、本セッションでは、若手がAIコミュニティに残っていく仕組みを若手自身がつくっていくこと、誤解を恐れず過大な表現をすれば、若手が主体的にAIコミュニティを担う人材を育てることを目的としている。メンタリングセッションとは相補的な関係になれば、と考えている。

### 4. 今後の展望

ここまでつらつらと立上げに至る背景と経緯について述べてきたが、どのようになるかは未知数である。実際、JSAI 2017の単発イベントで終わってしまう可能性も低くはない。しかし、筆者らとしては、JSAIは非常に楽しくかつ刺激的な場であり、また同じように感じている若手研究者も多数いると考えている。そのような人々が集まることで、異分野同士のコラボレーションや独創的な研究が生まれるような場を醸成していきたい。ゆくゆくは、「若手の会」による論文特集号や合宿形式のイベントなどもできればという構想もある。このような試みを通じて、10年後、20年後の学会の発展に寄与していきたいと考えているしだいである。

## 著者紹介



榎 剛史 (正会員)

2006年東京大学大学院工学系研究科修士課程修了。電力会社勤務を経て2009年東京大学大学院工学系研究科博士課程入学。2014年博士課程修了。博士(工学)。2015年より株式会社ホットリンク R&D マネージャーならびに東京大学客員研究員。専門は、自然言語処理、Webマイニング、社会ネットワーク分析。



吉田 光男 (正会員)

2011年筑波大学大学院システム情報工学研究科博士前期課程修了。2014年同博士後期課程修了。博士(工学)。同年より、豊橋技術科学大学大学院工学研究科(情報・知能工学系)助教。専門は、Web工学、自然言語処理、計算社会科学。